森茉莉『甘い蜜の部屋』論
～宗教的モチーフと聖書パロディ～

橋本朋香
（文19-0515　国語国文学専修　国文学コース）

1、「甘い蜜の部屋」梗概

2、先行研究と本論文の目的

3、作品内の宗教的な人物の類型について

4、作品第二部の登場人物について

5、作品第二部の「林檎」と聖書パロディについて

6、まとめ

1、「甘い蜜の部屋」梗概（第二部を中心に）

主人公の少女モイラは父林作に溺愛されて育つ。美しい少女に成長したモイラは、道徳や義務が嫌いでぼんやりとした人間だが、その美貌や無意識の媚態は周りの男性を魅了する。「愛の肉食獣」であるモイラも周りから与えられる愛情を貪るようにして生きている。

15歳になったモイラは、林作と共に訪れた石沼の別荘でロシア人の青年・ピータアと出会う。ピータアはモイラに衝動的かつ強烈に心を奪われ、モイラもまたピータアに興味をもつ。林作が留守にしている間に二人は「恋の出来事(アクシダン)」におちいる。しかしモイラが東京に帰ると二人の関係はそれきりになり、林作は魔の成長を遂げたモイラに「甘い蜜の歓び」を感じるのであった。

2、先行研究と本論文の目的

・宗教的モチーフに関する先行研究

「牟礼父娘の絶対性」

「キリスト教的父権制の破壊」

以上二観点から論じられたことはあるが、ディティールを分析したものはない。

・本論文の目的

宗教的モチーフの**ディティール**（宗教的モチーフが付随した人物像・作中の宗教構造）を分析

作品に登場する「**林檎**」にまつわる聖書パロディを分析・そのズレを明らかにする

3、作中の宗教的な人物の類型について

A：圧制者型
【特徴】抑圧的で支配的。「サジスティック」な憎悪を「道徳の皮」で覆い隠して、怠惰なモイラを支配しようとする。モイラとは敵同士。
【人物】
御包・柴田・ロザリンダ・介田伊作

B：聖母型
【特徴】家庭的で包容的。母性を持たないモイラとは対照的な存在。しばしば恋愛でモイラに敗れる女性たちでもある。
【人物】
マドゥレエヌ・タマァラ・片山園子・磯子

C：聖職者型
【特徴】自制的で禁欲的。しかし、モイラに魅入られてしまい、そのストイックさと本能的な欲望の間で板挟みになる。
【人物】
アレキサンドゥル・**ピータァ**・天上守安・ドゥミトゥリイ

D：異端者型
【特徴】開放的で魅力的。「魔」を持つとされ、四類型唯一の「勝利者」である。宗教に抑圧されたり、道徳的な規範に縛られることがない。
【人物】
モイラ・林作・ヱセル

4、作品第二部の登場人物について

本作第二部のキーパーソンとなる三人は、様々な宗教的モチーフを付随させながら描かれる。それは決して一定したものではなく、場面や時間経過によって変化し、彼らの特徴や力関係に大きくかかわる。

モイラ

・「**天使**」「**悪魔**」
→その他にも多くの宗教的モチーフをもつ。

ピータアは自分もモイラの「神」になろうとするが、林作には勝てない。

作中では「悪魔」をもつ人間は最も魅力的だとされている。共に絶対的な勝利者である。

ピータア

・「**牧師**」「**神父**」
→モイラとの情事の後、「**神**」を自称

林作はモイラの父親という点で唯一絶対的な存在。ピータアはそれに勝てない。

林作

・「**神**」「**悪魔**」
→作中の絶対神。キリスト教に畏れをもたない

5、作品第二部の「林檎」と聖書パロディについて

・第二部に登場する３つの「林檎」

印度林檎《林作・やよ（女中）→モイラ》

→ 父母の愛情を食べている

林檎の指環《ピータア→モイラ》

→ ピータアの愛情を食べている

モイラ自身《林作→ピータア》

→ 官能的な表現。林作という絶対神が守るモイラを食べながらお咎めなし

これらの「林檎」は、旧約聖書「創世記」の「禁断の木の実」を模していると考えられる。

それぞれ、**与える者→与えられる（林檎を食べる）者**が存在する

モイラの食事は、作中を通して「**愛情を食べる**」行為であり、「**官能的**」な行為でもある。

同時に、男性がモイラに食物を与えることは「**愛情を与える**」ことに等しい。

5、作品第二部の「林檎」と聖書パロディについて

「甘い蜜の部屋」	旧約聖書「創世記」
○「林檎」を食べる	○「善悪の木の実」を食べる
‖	‖
神に与えられたもの	神に禁じられたもの
↓	↓
林檎を食べることは 罪にならない	木の実を食べることが罪になる （＝原罪）
↓	↓
官能美の獲得・官能の肯定 妊娠への拒否	性への恥じらい 妊娠の義務・苦しみ

出発点が同じながら、様々な点で対比構造がとられている。
＝聖書の文脈を意図的に破壊し、新たな官能世界を構築

6、まとめ

- 「甘い蜜の部屋」には、様々な宗教的モチーフが組み込まれているが、作中の「勝利者」となるのは異端的な人物群である。
- 第二部では「創世記」を模した林檎と、それを食べる場面が組み込まれているにもかかわらず、それによって原罪のような罪が生まれることはなく、むしろ官能や快楽が神から与えられている。「創世記」の文脈は、ことごとく破壊される。
- 茉莉は宗教的モチーフを散りばめながら、抑圧的な聖書への批判を織り込んでいたと考えられる。